

## IARU GSP2010 報告書

### Development of sustainable periurban landscape - New vision and strategies

法学部四年

#### <はじめに>

今回の報告書を書くにあたって、現地でブログを書いており、そこに当時のリアルな思いが入っていたので、そのブログの記事をベースにして報告とする事にしました。「報告書」としては少々軽い文体や論理不整合があるかもしれませんが、ご容赦ください。

#### <コース概要>

このコースは授業を受けて、テストをこなすインプット型ではなく、アウトプット型である。グループでperiurban地域の問題点を考え、それに対する解決策を提示するのがゴール。ここでいう地域は一般的なものではなく、実際にケースに値する地域があり、そこでの開発を考えるというもので、コペンハーゲン市から一時間北上するとある、ベッドタウン的な郊外地域。

コースの長さは二週間で、最初の一週間はレクチャーが多く、次の一週間は課題発見と解決策を考えるため、グループ作業が多い。グループ作業だけの日を除き、毎日何かしらのテーマがある。

- 1日目：イントロ
- 2日目：ケースの対象地域のイントロ（実際に見て回る）
- 3日目：都市部拡大（guiding urban expansion）
- 4日目：郊外地域での農業
- 5日目：郊外地域における自然保護と余暇
- 6日目：気候変動と郊外地域
- 7日目：休み（日曜日）
- 8日目：グループ作業＋持続可能性の概要と計画
- 9日目～グループワーク中心の生活

基本的な構造としては、コペンハーゲンでは都市部が第二次大戦後拡大し、その拡大する都市部に対して、どのように景観を守っていくかが、都市計画における大きな課題だった。これに対して、政府はFinger planなる都市計画を策定。都市圏を人の手状に拡大し、その指の間に自然地域を入れて、住民がなるべく緑の多い地域に触れられるようにするというもの。

ただ、まだ問題は残っているので、それについてこの指の北の先にある、都市がまさに拡大していて、景観を保った開発努力が行われているところに行き、そこでの問題を考えるのがこのコース。

#### <生活環境>

コペンハーゲン大学の持っている施設で**Forest college**という所でプログラムは行われた。コペンハーゲンからはバスで一時間ほどの所であり、ケース地に属している。この**Forest college**は普通の学生もいるが、特に農業従事者に技術教育を提供している。夏休みという事で普通の学生がいないからだが、バーにはいつも地元で働きながら、大学で教育を受けているデンマーク人がいる。彼らと友達になったがすごく楽しい。ケース地自体が景観豊かな地域で、**Forest college**の周りの湖や森も落ち着く。

そして**Forest college**自体は自分にとって主に四つの部分からなっています。

#### ①居住区

居住区は完全個室でベッドと机、有線ネットつき。そして綺麗。信じられなかった。一つの建物に四つ部屋があり、二つのトイレとシャワーがついている。快適。周りも静かなので、作業も集中でき、下手したら自宅より居心地が良かった。

#### ②食堂

ここは完全なレストラン。多くの人が食べられそうな場所もあるが、サマースクール生は綺麗なレストランで食事。そして、その食事がまた美味しい。みんな毎回食べ過ぎてしまっていた。普通にコペンハーゲン市で食べたら5000円くらい取られそうな食事が提供される。

#### ③会議場

講義とかグループワークは主にここで行われる。無線LANとプロジェクター配備。なぜか毎日コーヒー・紅茶・スナック・果物が配備。リッチな会社のオフィスのよう。

#### ④バー

そして大学の施設内にバーがある。ビール一杯10クローネと安い。ここでいつもコースの仲間数名や、地元民と交流していました。思ったよりも人が来なくて、バーに行きすぎているイメージがついてしまった。

施設全体が芝生と木々にあふれ、天気の良い日は外にある机と椅子を使って作業。これだけ快適だと、市の中心部に住まなくても良いなと思ってしまう。少なくとも研究と

かするのなら、こういう場所はかなり良いだろう。もしかしたら、次の知識集約型産業の集積条件はこんな職住環境かもしれない。

### <プロジェクト>

このコースは講義で知識を吸収する事よりも、プロジェクトで実際に問題を考える事に重点を置いているので、その成果報告を。

まず、このプロジェクトは与えられたケース地に対して、クラスが五つのグループに分かれ、それぞれ課題解決を行うというもの。ケース地はコペンハーゲン市の郊外に当たるHillerod。ここの問題を考えて、それに対してプランを作るのがゴール。

ケース地の訪問の時点で景観開発に関する問題を見ていた事もあり、大体のグループが発展に対してどのように計画して、対抗するかというテーマに。自分のグループも都市開発に対して地域のもつ価値を守るというものに。

Hillerodはコペンハーゲン地域で三番目に大きいHillerod市を抱え、都市的な面を持ちつつも、地域で有数の森林地帯と高学歴人口を抱える複合的な行政区。都市部でない所には豊かな景観と農家が広がっており、魅力的な住環境。Hillerodは広域自治体である"Capital region of Denmark"に属し、ちょうど指の先端にあたる部分に位置している、基礎自治体である。それでいながら、都心部に一時間でアクセスできる。

広域がらみの話を一点。スウェーデン南部とコペンハーゲンエリアを合わせた地域が"Medicon valley"と呼ばれ、ここが世界でも有数のバイオや製薬関係の企業の集積地である。Hillerodもそこに属しており、中心部のHillerod市にはグローバル企業も立地している。(ちなみにHillerodと言う時は基礎自治体を指し、Hillerod市はその中の都市である)

さて、そんなHillerodはここ20年間人口が増加し続け、今後20年間も人口増加が見込まれている。そこで、そんな拡大に対応するプランを作るのがプロジェクトの目的。

自分のグループでは、Hillerodの価値を土壌、ビジネス、水、住宅、森林と定義し、(この辺の議論の持って行き方に論理的な収まりの悪さをずっと感じていたが)それを傷つけないような形で、増え続ける人口を収められるような開発を計画。グループの結論としては、中心都市のHillerod市は南部の良好な土壌に近く、自然公園にも近いことから、これ以上の都市拡大は避け、西部にあるSkaevingeという合併前に一つの自治体の中心だった都市を拡張(第二都市)、また、南部でも土壌の悪い部分を景観を楽しめる新居住地として開発(景観居住地)。第二都市の方はHillerod市の人口増による拡張を抑えるために拡張、景観居住地はさらに質の高い生活を期待する人を呼び込むために形成。これによって、土壌や景観、自然を守りつつ、Hillerod市のビジネス需要を支える。本当は、Hillerodに人を増やさなくても、周辺自治体に増やせばいいとか、ビジネスが集まるのを止めるとかも選択肢だったと思うが、今回は受け入れた。

グループの背景は景観開発・建築が二人、都市計画が一人、環境科学が一人。完全に法とか経済とかをやっていた自分は浮いてしまった。というか、コース全体でも一番異色の

専攻だった。ただ、その分プロジェクトの進め方が違って凄く面白かった。論理と数字、既存制度を使って議論を進めるのが今まで常道だったが、都市計画とかの点からは、とにかく地図に情報を書き込んで、適切な開発地域や、適切な開発イメージを作っていく。この過程がまた面白く、地図の上にトレーシングペーパーを何枚も重ね、それぞれに資源や交通インフラや土地計画を書き込んでいく。例えば、一枚目に資源を書き、さらにもう一枚重ねて、そこにインフラを書くなど。この手法は論理で突き詰めるのに対して、緻密さや目標への近さは失われるが、ヴィジュアルを出して発想するので、論理では出てこなかった解決策やイメージが出る。感覚的にアートに近く、頭の違う部分を使っている気がした。

#### <総括>

まず、英語で講義を受けて、一つのプロジェクトを仕上げると言うのは刺激的だった。そして、常に英語しか使用言語がない環境と言うのも初めてで面白かった。

内容に関しては、今までに学んだことのない内容だったので、新鮮。政策的な議論に関しては同じだろうと見込んでいたが、思ったよりも違った。一番違ったのは、地図を使って計画を進める点。そして絵とかを描いて、計画のイメージを出していく点。今まで論理と数字のみを使って政策課題や問題解決を考えてきたが、こちらは地図とイメージで解決策を導き出す。これは自分にはできなかつた事だし、凄いと思ったが、一方でクラスメイトは論理的に分析して、数字を使うことは苦手だった。この手法の違いに関しては、善し悪しが課題の種類にも依存しているのだろう。イメージを使う手法は景観開発とかに関しては非常に重要だと思った。それは人の目に見える「何か」を作り出す過程であるので、論理と数字では足りない。そして課題解決の手段も、法律やお金、ビジネスだけでなく、人々の暮らしている環境を物理的に変更する事もあり得る。その際にも有効。

この手段としての側面を見ると、論理的解析とイメージを使う手法は、戦略・政策目標設定と、その実行におけるオペレーションの区分にも見えるが、実際にその場所の地形や空間的イメージを少なくとも情報として持たないと、上位の戦略・政策目標設定もできないので、そう単純には語れないのではないだろうか。

そして、この手法は今まで自分が使っていた頭と異なった部位の頭を使わせる。合理的思考ではなく芸術的思考に近い気がする。合理的思考、論理的推論の結論は得てしてありふれたものになりがちだが、世の中の求めている解決策は、少し飛びぬけているものだと思う。そういった策を思いつくのに、この思考形態が有効にはならないかと思った。政策形成は常識に常識を積み重ねて行うものだと思っているので、その結論はしばしば目新しくなく、ただの事務作業のような形になってしまう。だが、ただの事務作業なら高度な教育と訓練を受けた人間が従事する必要はなく、（もちろんその処理量が高いとか、交渉力が高いという理由は大いにある）政策に高等教育を受けた人間が従事するなら、新たな付加価値を生む必要がある。それはビジネスでも同じで、良いアイデア、他では思いつかな

いモノが価値を持つ。そのひとつの形が、飛びぬけた政策案、アイデアなのではないかと思う。結論としては、政策は芸術たるべき、ないしはその側面を持つべきなのではないかと言う事。その意味で、今回の留学は一つの示唆を与えてくれた。

また、訛りのあるネイティブと冗談を交わすのがいかに難しいかも分かったので、今後の英語学習のモチベーションを与えてくれた。**Academic English**で留学に必要な高いスコア取っても、現地で楽しみきれない。

まとめて評価すると、今後の学習や仕事に対する考え方に示唆を与えてくれたという点では、自分の人生にとって意義ある留学であったし、毎日バーに通い続けながらちゃんと仕事をこなすことで東大と日本のイメージも強烈に留学生の間に残す事が出来たので、成功だったのではないかと思う。ただ、もっと英語力と根性があればプロジェクトの論理不十分な点や補強できる点を改革できたのに、途中で少し諦めてしまったのは失敗。次にこのような舞台に出る時は、どんなにバックグラウンドが違っても最高のアウトプットが出せるように、語学と学問より一層強化していきたい。

## IARU GSP 2010 報告書

University of Copenhagen, “Development of Sustainable Periurban Landscapes”

化学システム工学専攻 修士2年

### 【プログラムの概要】

コペンハーゲン大学のグローバル・サマー・プログラム、“Development of Sustainable Periurban Landscapes – New Visions and Strategies”は、2010年8月9日～20日の2週間にわたって開かれた。デンマークの首都コペンハーゲンから約40km北のNodeboにあるコペンハーゲン大学・フォレストカレッジ・キャンパス内のコテージに寝泊りし、朝から晩まで講義とグループワーク漬けの生活だった。12の異なる国籍を持つ学生24人が参加し、グループワークの対象地域であるHillerod自治区のフィールドワーク、ヨーロッパの様々な大学や組織、そして東大の先生の講義、そして何時間もの熱いグループワーク、の3つの活動を中心に、濃密で充実したプログラムだった。

### 【2週間の様子】

初日はコペンハーゲンにあるコペンハーゲン大学のキャンパスに集合し、自己紹介もそこそこにデンマークのランドスケープについての講義が始まった。続いてグループワークのメンバーが発表され、グループワークのターゲットエリアであるHillerod自治区のフィールドワークへと移動した。見渡す限りの草原や、エストニアからコンテナ船で運ばれてきた安価な建物が立ち並ぶ住宅地区など、様々な特徴を持つエリアを見学した後、フォレストカレッジに到着した。カレッジ内にあるコテージでは1人ずつ個室が与えられ、4人で1つのコテージを利用し、シャワールームをシェアした。周囲には森と湖しかなく、交通手段も限られている隔離された空間の中で、始めは出身大学ごとに固まりがちだった学生同士の連帯感と絆はすぐに深まっていった。

1週目は講義とフィールドワークが中心で、夜遅くまで講義が続く日もあり、毎日クタクタになったが、キャンパス内のキッチンでシェフ達が作ってくれる3食の美味しいご飯と、手作りのおやつに癒された。キャンパス内にあるスチューデントバーに毎晩通う学生や、朝早く起きて森の中を湖畔へ散歩する学生など、講義外の自分たちの時間をそれぞれ満喫していた。

2週目になるとグループワークが中心となり、ランドスケープについての背景知識や文化的なバックグラウンドが異なり、さらに英語を母語としない人間同士のディスカッションがどれだけ大変なものか、全員が思い知った。自分の考えをうまく伝えられないフラストレーションや、グループ内で中々合意が形成されない焦りに、誰もが疲れ果てた様子になり、休憩時間には別のグループの学生と愚痴をこぼし合ってストレスを発散していた。

2週間弱という短い時間では効率的・効果的にグループワークが機能するところまで発展したグループは無かったようだが、それぞれ皆が力を尽くして、お互いに納得できるよう

なプランの発表に漕ぎ着けた。特に先生が毎日ディスカッションの方向性を確認してアドバイスをくれたことや、中間発表で自分たちの進捗状況と改善点を確認することができたことで、短い時間でもそれなりの結論へと達することができたようであった。

### 【学んだこと・感想】

プログラムの始まる前からメールで連絡を取り合い、プログラム開始前日は一緒にコペンハーゲンの観光をするなど、参加前から他国の参加学生とコミュニケーションをとることができたので、プログラムにも馴染みやすかった。

ほとんどの参加学生が、テーマに関連した専攻の学生だったのに対して、専門外の私にとっては全ての講義が初めて耳にする内容だったので、内容を理解したり、たくさんの講義のつながりを考えたりすることが大変だった。また環境問題といった世界共通の課題についても、様々な文脈からの考察を学ぶことができた。例えばサステナビリティについてはこれまで化学的・工学的な観点から考えがちであったが、住生活環境とどのように関連するかという観点や、世界的に注目されている論文など、新しい面を学ぶことができた。

大学院生は自分だけかと心配していたが、院生や学部でも高学年の学生が多く、それぞれの興味や関心、研究内容についてなどのアカデミックな交流ができてとても良かった。

貴重な機会を与えてくれた IARU GSP に感謝すると共に、より多くの日本の学生に、このような国際的な勉強の経験をして欲しいと強く感じた。

